

小澤征爾は人たらしか

公務員医師会 安次嶺 馨



国際的スーパースター・オザワ

クラシック音楽界のスーパースター小澤征爾の訃報は、2024年2月6日、国内のみならず、世界のメディアから発信された。享年88であった。

小澤は1935年、満州国奉天（現瀋陽）で生まれた。歯科医の父親は山梨県の農家の出身であるが、満州国に渡り、たちまち政治活動のリーダーとなる進取の気概に富む人だった。小澤は父から海外雄飛の行動力を受け継ぎ、また満州で幼児期を過ごしたことで、大陸から世界を見る目を養った。

小澤は1941年、6歳で帰国し、東京の小学校に入学する。裕福とは言えない家庭で育ち、音楽教育に触れる機会が遅かった。15歳の時に、生涯の師となる斎藤秀雄と出会い、丁稚奉公のように厳しい音楽教育を受ける。1959年、24歳の時、ブザンソン国際指揮者コンクールで第1位となる。その後、タングルウッド音楽祭指揮者コンクール、カラヤン指揮者コンクールでも第1位となり、コンクール荒らしで名をはせる。26歳でニューヨーク・フィル副指揮者に就任し、バーンスタインの弟子となる。

その後、怒涛のごとく世界の音楽界を席卷し、30歳でトロント響、35歳でサンフランシスコ響、38歳でボストン響の音楽監督となり、ついに67歳で世界最高峰のウィーン国立歌劇場

音楽監督に就任する。古典音楽の世界では、モーツァルトのように神童と呼ばれる早熟型の天才と、ベートーヴェンやワーグナーのように30代から頭角を現す晩成型の天才がいる。小澤は後者に属する。

私にとっての小澤征爾

初めて小澤の足跡を知ったのは、著書「ボクの音楽武者修行」を読んだ時だ。私は山陰の街で、静かにラジオのクラシック音楽に親しんでいた医学生だった。小澤は私に近い世代（7歳上）のスーパースターで、いわば、大谷翔平が大リーグにデビューして活躍したように、世界の音楽舞台へ飛び出した期待の日本人指揮者だった。その頃、小澤が山陰へ演奏旅行に来て、私は初めて小澤の指揮と演奏に接した。

小澤は1964年から1969年まで、シカゴ郊外のラヴィニア音楽祭の音楽監督を務めた。私がシカゴで研修をしたのは1971年から1974年であるから、ラヴィニアで小澤の英姿を見ることはなかった。しかし、研修病院の指導医は小澤がいかに素晴らしい指揮者であるか、熱っぽく私に語ってくれたので、わが事のように嬉しかった。

時代はずっと下って2020年、私は初めてウィーンを訪ねた。小澤の活動拠点であったウィーン楽友協会ホールやウィーン国立歌劇場に彼の足跡を追い、小澤の存在をより近くに感じた。私は若い頃はオペラに全く興味がなく、オペラを聴くようになったのは50代以降である。ちなみに、小澤も若い頃、オペラに興味がなかったという。ボストン響音楽監督として経験を積んだ小澤のパリ・オペラ座デビューは44歳、ミラノ・スカラ座は45歳、ウィーン国立歌劇場は53歳のデビューである。それでも、67歳から75歳まで、ウィーン国立歌劇場の音楽監督を務めた。私も、人生後半に至ってオペラ好きになったのは小澤と一緒にのだと悦に入ってる次第。



ウィーン国立歌劇場

小澤は、クラシック以外の音楽でブルースやジャズも好きだという。また、日本の演歌が大好きで、中でも森進一と藤圭子がお気に入りらしい。ボストン時代、森進一の「港町ブルース」や藤圭子の「夢は夜ひらく」など、ボストンとタングルウッズの往復に車を運転しながら、よく聴いたという。そうなのだ。私も昔は演歌が好きで、よくカラオケで歌ったものだ。ここでまた、小澤と私は音楽の好みが同じだとほくそ笑むのは、全く勝手な「推し」である。

小澤は人たらしか

音楽の友特集号（2024.4）から音楽ジャーナリストの池田卓夫氏の言葉を引用する。

「人物論の角度から、小澤の同類を探せば、政治家の田中角栄と野球の長島茂雄の二人に行き着く。田中、小澤、長島の3人に共通するのは、稀代の人たらしであること。古くは豊臣秀吉に始まる人たらしの系譜はみな人心掌握術に秀で、ひとたび本人に会い、言葉を交わせば、昨日までアンチだった者を即、ファンに寝返らせるだけのヒューマンスキルを備えている」

ところで、小澤はニューヨーク・フィルの副指揮者時代、27歳で桐朋同期生の江戸京子と結婚した。小澤がパリにスクーターで到着した時に、面倒をみたのが江戸京子である。

小澤は著書「おわらない音楽 私の履歴書」の中で、次のように述べている。

「結婚した江戸京子ちゃんはピアニスト。どちらかが音楽の勉強をしている時、もう一方は勉強に集中できない。音楽家同士の結婚は難しいと誰かに言われたことがあった。確かにその通りだった。海外にいる間はいつも別居。結婚当初からうまくいかなかった。

最後にうちの親父と京子ちゃんの親父の江戸英雄さん、仲人の井上靖さんの話し合いになった。そこに僕が呼びだされて、最終的に離婚が決まる。でも、離婚後も江戸英雄さんは僕のことを息子だと言って、ずっとかわいがってくれた。後に僕が再婚し、娘の征良が生まれた時は、赤ん坊を見たいと、僕の一時帰国中に滞在先のホテルまでやってきた。征良を抱き、良かったとすごく喜んでくれた。その後、京子ちゃんも赤ちゃんに会いたいと言う。会わせると、同じように祝福してくれた。それから僕たちは友人に戻り、今も良い関係が続いている」

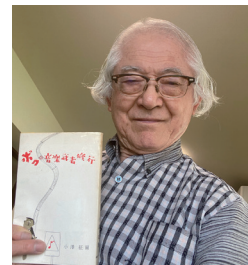


ウィーン楽友協会

うーむ。これこそ小澤の人たらしたるゆえんか。ちなみに、小澤の長女征良は随筆家として、長男の征悦は俳優として活躍中である。妻は言わずと知れた、一世を風靡したファッションモデルでデザイナーの入江美樹である。

おわりに

小澤が27歳で「ボクの音楽武者修行」を著した時、私は20歳の学生だった。私はその後60年にわたって小澤から元気をもらい、今や齢80を超えた。私のスーパースターはあらゆる困難に果敢に挑み、切磋琢磨し、斯界の頂点に立った。私は小澤の足元にすら近づくことはできないが、彼が7歳上の「我らの世代のチャンピオン」という気持ちを、ずっと持ち続けてきた。せめて、彼の生きた年齢まで、意味のある日々を送りたいと思う。小澤征爾氏のご冥福を心から祈りつつ、筆を置く。



小澤征爾の著書を持つ筆者

参考文献

- 1 小澤征爾. 僕の音楽武者修行. 音楽之友社 1962
- 2 小澤征爾. おわらない音楽. 日本経済新聞社 2014
- 3 音楽の友 特集号「追悼 小澤征爾」2024.4